

アルゴリズムの扉

Door of Algorithm

米窪 洋介*

Yosuke YONEKUBO

要旨

本稿は、筆者（米窪）が制作した彫刻作品《アルゴリズムの扉》の概要と作品写真である。また、掲載図版は令和4年10月19日～10月31日に国立新美術館にて開催された第75回二紀展にて展示された彫刻作品である。なお本稿の趣旨は、文化芸術を社会へ発信していくとともに、今後の研究に活用するための資料としてまとめた報告である。

【キーワード】 彫刻

1. はじめに

筆者は、研究および教育の一環として彫刻作品の制作を行っている。また、研究発表や社会への文化発信も含め、2012年より二紀展への出品を始め、現在は二紀会の会員として秋に行われる展覧会に毎年継続して出品している。

本稿は、筆者が令和4年度に制作した彫刻作品《アルゴリズムの扉》の概要を記したものである。また、掲載した図版は、第75回二紀展において、令和4年10月19日～10月31日の期間に国立新美術館（東京都）で展示を行った作品である。

以上のことを踏まえて、芸術の分野における彫刻表現について情報を発信するとともに、今後の研究に活用するための資料として、作品概要と図版をまとめ報告する。

2. 目的と方法

現在試みている研究は、彫刻の存在というものに焦点を当てた上で、①実体と挟まれた空間、②構成された空間、③空間と空間との境界という3つのキーワードをもとに、反実体的量塊⁽¹⁾を内包する彫刻表現についての実験と検証である。この反実体的量塊というものが、新たな彫刻表現の可能性を含んでいると筆者は仮定している。その中で、本作においては、②構成された空間と③空間と空間との境界という2つの要素を元に彫刻の制作を行った。

3. 作品の概要

《アルゴリズムの扉》と題された作品は、高さ204cm、幅54cm、奥行き39cmで、木材、真鍮、銅、アクリルで作られた作品である。作品は、蝶番によ

て扉状の木枠が左右に止められており、木枠の側面には中央ほどの位置に真鍮の取手、上部には真鍮のプレートが左右対照的に付いている。なお、木枠は無着色のままとなっており、内側には、アクリル板が中央に挟まれている。また、アクリル板の表面には茶色に着色されたブロック状の木材が組み合わされており、アクリル板の両面に取り付けられている。また、木材同士は、真鍮管、銅管、ステンレス管で繋がれており、組み合わされた木材のブロックが連結されている。なお、ブロック状の木材の表面には、四角い真鍮板や銅板が釘で固定されている他、丸状の真鍮または銅の釘が打ち込まれている。

4. おわりに

本稿では、彫刻作品《アルゴリズムの扉》についての概要と図版の掲載により報告を行った。しかしながら、現時点では作品の分析および他の研究との繋がりを考察するまでには至っていない。そのため、今後の研究において本稿を活用しながら、彫刻表現について分析を行い、彫刻表現の可能性について研究を進めていきたい。

註

(1) 反実体的量塊とは、筆者が「実体を伴わない量塊と彫刻との関係—イギリスにおける近現代彫刻からの一考察」（松本短期大学紀要第33号2022年）のなかで定義づけを行った、彫刻における実体を伴わない空間のことである。彫刻の存在というものを捉える上で、実体の部分とは別に、実体を伴わない空間に彫刻としての量塊を見出し、その空間が彫刻の存在を示す重要な要素を構成しているという考えである。

* 松本短期大学

「Door of Algorithm」



H204 W54D39 (cm) 木・真鍮・銅・アクリル 2022年
Yosuke YONEKUBO